

クロニカ(4) —ありふれたるもののクロニスタ、フェルナンド・サビーノ

CRÔNICA(4) —Fernando Sabino, o cronista do corriqueiro

エレナ・トイダ
Helena H. Toida

O presente trabalho vem a ser uma sequência da série de estudos sobre a crônica, este gênero *sui generis* da literatura brasileira, abordando desta vez um dos representantes máximos desse gênero do século XX, Fernando Sabino, juntamente com Rubem Braga, este referido no trabalho anterior.

Já foi mencionado nos trabalhos anteriores que a crônica começou a se destacar no meio literário desde os meados do século XIX através dos trabalhos de grandes literatos como José de Alencar e Machado de Assis, passando a ser aprimorado com João do Rio no início do século XX e finalmente se consolidando com Rubem Braga.

Neste trabalho abordaremos um dos maiores cronistas do século XX, Fernando Sabino, que, juntamente com Rubem Braga, lapida o gênero crônica, revestindo-a de humor, leveza e perspicácia.

Sabino produziu um grande número de crônicas, recebendo em 1994 o Prêmio Jabuti pelo conjunto da obra. No presente trabalho apresentaremos suas crônicas produzidas principalmente na década de 1960, quando esse gênero começa a ser aprimorado através do aparecimento de grandes cronistas.

Os temas preferidos de Sabino se concentram em torno do cotidiano da realidade brasileira, buscando o irrisório, o circunstancial, e fazendo, dessa forma, com que os leitores se identifiquem com tais acontecimentos. O cronista reflete sobre sua postura perante a crônica, através da célebre “A última crônica”, chegando a atingir a universalidade, transpondo o nível de definir esse gênero apenas como menor.

はじめに

本稿は以前より発表している拙稿 (1) の続きである。これまで、「クロニカ」というブラジル独自のジャンルの起源に始まり、20 世紀初頭のリオの街頭をテーマとしたジョアン・ド・リオ、そしてクロニカをブラジル文学独自のれっきとした一ジャンルとして確立し、クロニスタという名目のみでブラジル文学史に名を連ねるルーベン・ブラガと、考察を重ねてきた。クロニカの研究が進むにつれ、幾度となくその奥深さを筆者に思い知らせてくれるのがこのジャンルの素晴らしいところである。

クロニカがどのようなものであるかを、再度様々な角度から以下まとめて述べてみたい。

文芸評論家のアフラニオ・コウチニョ (Afrânio Coutinho) (2) は次のように定義する。

クロニカとは、その本質において、強い抒情をもつ一つの芸術、言葉の芸術である。

非常に私的で、人生のスペクタクル、出来事、生きとし生けるものを前にして起こる個人的な、そして本質的なリアクションなのである。

文芸評論家として最も著名なアントニオ・カンディド (Antonio Candido) (3) の定義は、その的確さゆえ、クロニカに関する論文では必ずといっていいほど言及される。

クロニカは「メジャーなジャンル」ではない。文学が偉大なる小説家、戯曲家や詩人たちで形成されるように、いくら優れていたとしても、偉大なクロニスタ (4) によって形成できるとは想像もできないだろう。またノーベル賞をクロニスタに授与するとは考えもしないであろう。従って、クロニカとはやはりマイナーなジャンルであるようだ。

「ありがたいことに」とカンディドは続ける。マイナーなジャンルであ

るが故、クロニカは常に巷の人々の身近に留まり、とるに足らぬ日常生活の出来事を通して楽しませてくれるのだという。

また偉大な写真家、カルティエ＝ブレッソン (Henri Cartier-Bresson) (5) は、次のように述べているが、「見せる」点において写真とクロニカは類似すると思われる。

私が愛するのは、自らをも忘れる一瞬のうちに、被写体がもたらす感動と形状の美しさを記録する写真の可能性だ。そこに現れたものが呼びおこす幾何学だ。

その日常の一瞬を的確にとらえ、読者に共感を引き起こすべく、簡潔に一つの世界を創りあげる―これがクロニスタの仕事である。また新聞や雑誌の片隅に毎日のように掲載され、次の日はもう紙屑と化しているクロニカは、その短命ゆえ常に読者の身近に在り、一時の楽しみを与える使命を果たすのである。長く読者の記憶に留まろうとはしない。むしろその一瞬の共感または感動のみがクロニカの原動力だといえる。

「シンプルな言葉ほど心に響く。単純なものほど美しい。」とは、クロニカを1ジャンルとして確立させた立役者ルーベン・ブラガのコメントだが、彼はここに徹して作品を書き続けた。そのクロニスタ仲間の一人に、共同で1960年 (Editora do Autor) と1967年 (Editora Sabiá) にそれぞれ出版社を創設したこともあるほど深い交流があり、ブラガと共に20世紀の天才クロニスタと称されるフェルナンド・サビーノ (Fernando Sabino) がいる。

フェルナンド・サビーノ

サビーノは1913年、ミナス・ジェライスの州都、ベロ・オリゾンテで生まれる。幼少期から書くことに興味を持ち、12、3歳の頃は既にあるラジオ番組が主宰するクロニカ・コンクール「リスナーは何を考えているのか」に熱心に投稿していた。そして14歳からは、純文学を志し、よりシリアスなテーマを模索していたのである。当時のことを振り返り彼は言う。「駆け出しのこの頃、父親の古いタイプライターが頼りだった。なにより

もポルトガル語の文法を詳細に勉強し始めたことが役に立った。」(6) 加えて同郷の作家達に影響を受け、1941年に処女短編集『こおろぎはもう鳴かない』(*Os grilos não cantam mais*) を出版した際に知り合った、ブラジル近代文学の法王と称されるマリオ・デ・アンドラーデ (Mário de Andrade) (7) や、その後長く親交を重ねることになるルーベン・ブラガ、そしてパウロ・メンデス・カンポス (Paulo Mendes Campos) (8) など、逸材に囲まれていたこともサビーノの人生に幸いしている。

1930年から40年代にかけてのブラジルは、ヴァルガス新政権の樹立など、政情不安な時期だったが、50年代には「黄金期」とも称される発展期に突入する。これと同時に、30年代に1ジャンルとして確立されたクロニカは、より洗練された作風を携えた有数のクロニスタを輩出することになるのである。非識字率が減少し、読者層が増えるに従って新聞や雑誌の発行部数が増えるのもこの頃である。この事実を考慮した場合、人々の日常生活をテーマとし、またその短さゆえ、新聞や雑誌の片隅で読者を楽しませたとしたら、クロニカがその地位を確立するのにあまり時間を要さなかったといえるのではないだろうか。カンディドが言うように、クロニカはその謙虚さを通して読者により接近し、洗練された、しかしシンプルなフォームをもって、「予期せぬうちに控えめながらも完全なるものへの候補となる」のである。

この時代のクロニスタは、まさにブラジル文学独自のジャンル、クロニカの洗練に徹底した。ユーモアや軽さ、またブラジルらしい文体の試作、フィクションや叙情の技術を駆使して現実の再構成を試みるようになり、より「文学的」な作風を確立していく。

その中でもサビーノは、叙情的な傾向の強いブラガとはまた異なり、人間を観察する視点がウィットに富んでいるといえよう。笑える一面と共に、人の心に潜む狡猾さや機微をも見逃さない鋭い切り口が彼の特徴である。サビーノがこのジャンルにどのように取り組んできたか、いくつかのサビーノの作品を通し以下で考察していきたい。

サビーノのクロニカ

1956年、初めての小説であり、自叙伝の要素が濃い『定められた出逢い』

(*O encontro marcado*) の出版は、サビーノに作家という道を歩ませるきっかけになった。しかし、彼が名声を得るのは1960年に出版されたクロニカ集『裸の男』(*O homem nu*)による。

クロニカは人々の日常を一瞬間間見るという特性ゆえに、時の腐食に抗えない作品が多い。たとえばある作品のテーマが、それが書かれたときに流行っていたものだとしよう。時が経てば、それは新聞の片隅で読者を楽しませるものではなくなる。それゆえ、長きにわたって書き貯められたクロニカは、多くの場合アンソロジーが編まれる。文学作品本来の普遍性を与えるため、このような方法がとられるのである。

クロニカは1950年代に黄金期を迎えることになるが、サビーノの作品に関していえば、ブラガと共に出版社を経営していた60年代が最も波に乗っていたように思われる。

『裸の男』(*O homem nu*, 1960)、『隣の奥さん』(*A mulher do vizinho*, 1962)そして『旅の道連れ』(*A companheira de viagem*, 1965)はブラガとの共同経営の最初の出版社 *Editora do Autor* 時代に、『魅力的なイギリスの女』(*A inglesa deslumbrada*, 1967)は、やはり同じく共同経営の出版社 *Editora Sabiá* から発行されたものである。

サビーノの作品はよく教材に取り上げられるが、中でもその代表的なものを軸に彼のクロニカの特徴について考察を試みたい。

まずは、サビーノの名を一躍有名にした1960年出版のクロニカ集『裸の男』の中から、タイトルにもなった作品「裸の男」(*O homem nu*)を取り上げる。

起きると、妻に言った。

「なあ、今日はテレビの分割料金を払う日だ。集金人が必ずやってくる。で、昨日銀行で金を下ろすのを忘れて、一銭もないんだ。」

「じゃ、説明すればいいじゃない?」と、妻。

「それは嫌なんだ。まるで詐欺みたいでさ。義務はちゃんと果たさなきゃ。それがモットーなんだよ。だから彼が来たら、留守に見せかけるために家の中で音をたてずにじっとしていよう。彼があきらめるまでね。明日払えばいいからさ。」

分割払いで買ったテレビ、払えない事情を説明するより何とかうまく逃れようとするなど、ブラジル人の生活の様々な側面を映し出しながら、最後は結局骨折り損に終わるとい話なのだが、そこに読者が共感を覚えクロニカに引き込まれていく。

シャワーを浴びようと服を脱ぎ、外の廊下に届けられたパンを取ろうと出たとたん、ドアがしまっしまい、裸の男は締め出される。妻は決められた通りチャイムを鳴らしても息を潜めているばかり。こうして男の悲(喜)劇が始まる。裸でパンの包みを持ったまま、「練習不足でグロテスクなバレエを踊っているかのように」どうしようかと慌てるが、なす術も無い。とにかくどうすれば誰にも見つからず、逃げおおせるものか。とうとう痴漢と間違われ、近所が騒ぎ出し、妻が何事かとドアを開けたのでようやく家に入ることができて一件落着と思いきや、チャイムが鳴る。多分痴漢を捕まえにきた警察だろうとドアを開けると、そこには居留守を使ってまで会いたくなかった集金人が立っていた。

最後までサビーノ＝レポーターは、繊細なユーモアたっぷりに男の恐怖にとらわれた情景を細部まで描く。この語りにはまるで実況中継のようなテクニックがあり、読者はいつの間にか裸の男の出現で混乱する人々の一員となるのである。

また「ブラジル人天使」(O anjo brasileiro)でも彼のユーモアは健在である。移民としてブラジルにやってきたスペインの男の前に、1938年のある日、天使が現れこう告げる。

「あなたは不運な事故に遭うのです、おじいさん。しかしまだあなたのお迎えではないので、がんばってくださいね。」

そしてその通りに、彼は助かり生き延びた。天使は1956年に再び現れ、また死にそうなることを告げ、今回も彼の番ではないと言う。天使が消える前に、男は自分がいつ死ぬのかたずねる。それは66歳の誕生日、つまり1959年3月25日だという。それから男は家族や知り合いにそのことを告げ、件の日に向かってすべての準備を整えるのである。やがてその日がやってきた。しかし男はなかなか死なない。お告げどおりにならないことに激怒した群集は、それを実行しようとする。つまり男を殺そうとし、

大騒ぎになったところで彼は警察に保護を求めることになる。

不本意ながら、別の地区に引っ越さなければならなくなった。
「ブラジル人の天使の言うことなんかきくから、こんな羽目に陥るんだ。」とぶつぶつと文句を言った。

ブラジル人の天使の言うことは信用できない。信用すると窮地に立たされるということである。つまりブラジル人のちょっといい加減な側面が皮肉っぽく描かれている。読者は最後の一言にやはりうなずかないでいられない。嘘をつこうとしているわけではないが、聞かれたことにはとりあえず答えてしまうお調子者なのだ。

しかしユーモアだけが彼の特徴ではない。同じクロニカ集に収集されている「ジミー・ジョーンズ」(Jimmy Jones)では、とても繊細な問題―人種差別―をテーマにしている。

今でもジミー・ジョーンズのことを思い出すと胸が締め付けられる。後悔としての痛みというよりは、生涯我々の良心を悩ます痛みである。

彼に初めて会ったのはマイアミからニューヨークへ行く途中だった。中年の黒人でアメリカのジャズ奏者に多い肌の色をしていた。

昔は結構有名なサクソフォン奏者だったが、手術をしてから今は列車のウェイターをしているとのことだった。ブロードウェイで会うことを約束し、ジャズの隠れ家をいくつか紹介してもらおう。そして何年後、アメリカにおける黒人の問題に興味を持った「私」は、ハーレムでジョーンズを探していた。当時ニューヨークではリンチ事件などから白人が黒人居住区に入るのは危険だった。ようやく彼の家を探し当てたが、ちょうどパーティーをしていた。数人の黒人に囲まれ、一人だけ白人だということに居心地の悪くなった「私」は、帰ってしまう。しかし、そのパーティーは自分のためだったことにあとから気づく。

戻る勇気は無かった。一度電話をしてみたが、彼は旅行中だった
…そして生涯二度とジミー・ジョーンズに逢う事はなかった。

クロニカはこう終わっている。「私」は周りの情報に影響され、真実が見えなくなってしまったのだ。黒人の差別問題がベースとなっているが、話の筋はどのようにも置き換えられる。そして後味の悪さを読者も思い返すことになるのだ。噂に振り回され、真実を見失ってしまったことは誰しも経験のあることだろう。そんな苦い思い出を呼びおこさせる最後の文は心に響く。

続いて、サビーノの最も得意な、親と子供の心理をテーマとする作品群について考察したい。子供とはまさに予期せぬ出来事の連続を実感させてくれるものである。大人、特に親は、多くの場合振り回されっ放しで、怒る力も萎えてしまうことがあるのは周知の通りである。サビーノはどのように親子関係をクロニカで扱うのか。

1962年出版のクロニカ集『隣の奥さん』(*A mulher do vizinho*)にはサビーノの代表的な作品がいくつか収集されている。このアンソロジーにも教材に使用されるクロニカが多くある。

「生後10分」(Dez minutos de idade)では、生まれたばかりの息子と対面する父親の心理が詳細に描かれている。よく言われることだが、母親は妊娠した時点で母性愛が芽生え子供との一体感を感じるようだが、父親は自分の子供と言われてもすぐに実感がわかないらしい。五体満足で生まれるという偉業を成し遂げ、すでに10分の命を生きている子供にいろいろと思いをめぐらす。最初は生まれたばかりの子供の外見について客観的に述べているだけなのだが、父性愛が少しずつ芽生えていく様に、読者の共感が促される。

君が触れる全てのものに、君の誕生が僕に与えてくれた喜びを刻みなさい。君の子供時代がどんなものであろうと、謳歌しなさい。僕は守ってあげる。そこから信念が生まれるのだから。(中略)僕は名前以外に君にあげられるものは何もない。(中略)名前とこの星以外には君にあげられるものは何もないのだ。その星を信じるなら、取りに行きなさい。

この「星」にはどんな意味があるのだろうか。読む人によってそれぞれ異なるであろうが、筆者は子供の運命そのもだと思われる。自分の信じた道を生きてくれと願う父親の想いとは、このように静かで深いものだと、読者は自分が生まれた時のことと重ね合わせて反芻するのだ。

「少年」(Menino) は、サビーノが、時間の順序に関係なく、母親が毎日子供に向かって言う台詞のみを並べて作った印象的な作品である。その中で読者は、ユーモアや思いやりの言葉で綴られる母親の想いの深さを思い知るのである。母と子の関係に見られる思いやり、苛立ち、守りたい気持ちなどを台詞だけで紡いでいく手法に読者は引き込まれていく。この作品はよく教材に使用される人気のあるものの一つである。以下、印象的な台詞をいくつか抜き出してみるが、そのどれもが、幼少時代に聞いた母親の言葉である。気遣い、心配、怒り、面倒、矛盾、その他諸々の気持ちが交錯する中、読者は母親を、子供時代を思い出す。

ほら、もう遅いから中に入りなさい。手を洗ってきなさい。歯はもう磨いた？お父さんにお休みなさいを言って。今すぐベッドよ！パパとママ、どっちが一番好き？何でそんなに静かなの？絶対何か企んでるわね。ね、話せばわかることでしょ？これは大人の話なの。あとであげるわ。あとで連れて行ってあげる。あとで話してあげる。あ・と・で。だめって言ったらだめなの！アイスはだめよ、かぜをひいてるでしょ。ママのこと、恋しかった？さあ、もうお休みなさい、坊や、キスをちょうだい。神様がお守りくださるわ。神様、どうか坊やを。

父親が仕事をしようとタイプライターに向かったとたん、3歳の息子がリビングで椅子を押す遊びを始め、騒々しい音をたてる。父親はやめるように言うのだが、子供にとっては、それは騒音をたてているのではなく、ただ椅子を押して遊んでいるだけのことだった。やめないので叱ると、家を出て行ってしまう。姿が見えないので慌てて父親が捜しに出て、連れ戻すのだが…

「そこで静かにしているんだよ！わかったね？パパは仕事をしているんだから」

「わかった。でもこの椅子は押して遊ぶからね」

これが「家出」(Fuga)のあらすじだが、子供のゆずらない主張に苦笑いさせられる。そして子供には子供の言い分があるということを改めて思い起こさせる作品である。

「誕生パーティー」(Festa de aniversário)は、レオノーラという女の子が、自分の誕生パーティーで、コーラの栓を飲み込んだというところから始まる。驚いた父親は親戚を集め皆で救急病院や他の病院を駆けずり回る。驚きや心配、レントゲンや検査の後で、医者にも何も飲み込んでいないと言われる。するとレオノーラははしたり顔で飲み込んですぐ吐き出したと言う。あっけにとられ、安心すると同時に大騒動を起こした恥ずかしさにそそくさと家族皆を引き連れて去る父親—その姿に多くの人が自分を重ねて苦笑する。

しかし、サビーノは子供の面白可笑しい側面だけに焦点をあてるのではない。「ニウソン」(Nilson)は11歳の少年で、映画館の近くの街路で車の番をしている。このような小遣い稼ぎをする子供の存在もブラジル社会の一側面である。勉強が好きで、4回もバスを乗り換えながら学校に通い、得意顔でサッカーについて詳しい話をする。母親は看護婦で、父親は警察官らしいが別に女がいて、たまにしか家に帰らない。

「お父さんは君が好きかい？」

「いや」

「どうして？」

「帰ったら、すぐ僕を怒鳴るんだよ」

ぶたれた犬のように、悲しそうな、あきらめきった瞳だ。

それでも父親を慕う気持ちは隠せない。家族がいつも全員そろっていた頃のことが恋しいのだ。「君はまだお父さんが好きなのかい、ニウソン？」と問いかけると、唇をぎゅっとかみ締めて横を向きながら、「好きだよ」とつぶやく少年の複雑に揺れ動く気持ちが何気ない会話で表現されている

クロニカである。いかにもサビーノ自身に起こった話のように語ることが現実味を増す要因となっている。

「なぜテレビを見ていちゃいけないの？」

「もう寝る時間だからだよ」

「なぜ？」

「寝る時間」(Hora de dormir) (『旅の道連れ』(*A companhia de viagem*) 所収) の冒頭部分である。会話のみで構成されているが、これもサビーノがよく使用するテクニクである。会話であるが故、より現実味をもって読者をクロニカの中に引き込んでいく。

早く寝ると子供をせきたてるのはいつものことである。子供はその訳をきちんと説明しろと父親と押し問答になり、つい「うっとうしい」と言っ
てしまい、ぶたれてしまう。このクロニカで失笑をかうのは、父親が必死に理由にならない理由を述べ立て、墓穴を掘ってしまうところである。ぶたれた子供はとりあえず納得したかのように謝るが、最後に「なぜテレビを見ていちゃいけないの？」と元の木阿弥になるのである。

これら一連のクロニカは、すべてありふれた日常の出来事に終始している。登場人物が「私」であったり、親と子供の間に関わされる駆け引きであったりするが、それらはすべてフィクションである。まるで現実
に起こった出来事かのように書き上げられているのがクロニカの特徴である。取るに足らぬほんの些細な生活のワンシーン、何気ない眼差し、心の動揺―これらは創作のきっかけになるかもしれないが、クロニカはあくまでも作者の創造物であり、リポーターの眼をもって展開させるものなのだ。

「ある出来事の客観的な報告と空想に彩られた創作との間で揺れ動く」のがクロニカだと述べたのは、著名な文芸評論家モイゼース (Moisés) (9) であるが、改めて的確な定義だと言わざるを得ない。

多くの研究者は、サビーノの特徴としてユーモアをあげるが、これは彼の一側面でしかない。無論笑いの中にも普遍的な要素は散りばめられているのだが、筆者が彼の作品群の中で最高傑作と考えるクロニカは、叙情と思いやりにあふれた作品で、サビーノのクロニスタとしての姿勢を最も的確に表現している「最後のクロニカ」(*A última crônica*) である。

彼はこのクロニカをマヌエル・バンデイラ (Manuel Bandeira) (10) の詩から思いついたと言っている。

最後の詩

私の「最後の詩」にはこうあってほしい
もっともシンプルで好意的なことに触れながら、優しくあってほしい
涙を流さない嗚咽のように情熱的であってほしい
かすかに匂う花の美しさを
もっとも透明なダイヤを侵食する炎の清らかさを
一言も説明せず自ら命を絶つ者たちのパッションをもってほしい

帰路の途中、コーヒーを飲もうとパール (11) に立ち寄った「私」=ナレーターは、クロニカを書くということについて考えをめぐらせ始める。

私はただ日常生活の中から、ともすれば霧散しそうな人間の内面を採集しようとしているだけだ。

(中略) 街角のワンシーン、子供の何気ない言葉、または家庭の偶発的な事情など、思いがけない出来事を追跡するにつれ、私は単なる観客と化し、本質を見失っているのだ。語るべきものは何もなく、うなだれてコーヒーを飲む間、ある詩の一行が記憶の中に繰り返される。「私の最後の詩にはこうあってほしい」。私は詩人ではないし、テーマも見つからない。そして今一度、クロニカを書くに値するテーマが転がっている、外の世界に目を向ける。

その時、店の奥のほうに、黒人の夫婦が3歳くらいの娘を連れてテーブルにつく。女の子は髪にリボンをし、質素な服を着ていたが、どこことなく緊張しているようだった。何かを食べるといよりも、もっと大事な事があるように見えたので、「私」は観察を始める。父親がそっとポケットから金を出し数える。そしてようやくウェイターに注文をする。出てきたのは、コーラ1本とぱさぱさしたカステラ的一切れだった。すぐに食べないので、気になってじっと見ていると、3人はまるで慎重に儀式を行うかのようにテーブルを囲んでいるのが見てとれた。すると、母親が黒いビニー

ルのバッグから白い小さなろうそくを3本出したのだ。クロニスタのほかにも誰も彼らのことは見ていない。そのろうそくをカステラに注意深く挿し、火を点ける。すると女の子は力いっぱい吹き消し、小さな声で「ハッピーバースデー」を歌い始める。それに合わせて両親も静かな声で一緒に合わせる。女の子はやっと食べ始めた。母親は彼女のリボンをなおしたり、ぼろぼろ落ちるカステラのくずをはらってやったりしている。

父親は満足した顔で、パールの中を見回し、お祝いが成功したことに納得しているかに見えた。突然、観察していた「私」と目が合い、恥ずかしそうにうろたえた。躊躇し、うなだれるかに見えたが、じっとこちらを見つめ返し、にこやかに微笑んだ。

私の最後のクロニカにはこうあってほしい―この微笑のように清らかなクロニカで。

世の中のすべての不条理も理不尽さもすべて除外された空間に、3歳の娘の誕生日を一心に祝っている父親―それは、実に厳かな儀式なのだ。人は人としてこうあらねばならないと、このクロニカからそんな声が聞こえてくるような気がするのである。

道端に転がっている石ころのように、日常的なありふれた出来事がサビーノの手にかかると輝く。それは多分に「最後のクロニカ」に見られる彼の姿勢に拠るものであろう。誰にも知られず、いやむしろ知られたくないかのように、ささやかな誕生祝いが街角のパールの片隅で行われている。それを成功させた父親の一点の曇りもない至上の笑顔―もし最後に書くべきクロニカがあるとしたら、この父親の笑顔のようなものでなければならないのだ。普通の人々の目には、それは単なる平凡な1シーンである。パールの片隅で何かこそこそとしている子供連れ―このようにしか写らないシーンをクロニカ作成の定義に結びつける。それは自分のクロニカの理想を示すと共に、読者に心地よい反省を促す―貧しいこの親子のささやかな行為を理解し、この汚れない微笑を心のどこかに残してほしいと。その根底には全く揺るぎがない。人間が時折希求する完璧なまでの純粋さ、煩惱をすべて除外した崇高な精神、それを切望しているかのように見える。

著名な文芸評論家のダヴィ・アヒグッチ (Davi Arrigucci Jr.) によると、

「日常の予期せぬ出来事をとらえようとするジャーナリズムに鍛えられたクロニスタの眼は、瞬間をとらえるためにスタンバイしている。クロニスタは、いくなれば、時の流れの抒情詩人だ。」(12) だからこそ、そのスタイルはイメージや突然のひらめきに彩られているのだと断言していることにもうなずけるのではないだろうか。

またサン＝テグジュペリが『人間の土地』(13) で言及しているように、下界に灯る明かりの一つ一つの下には、とるに足りないささやかな生活があるのだ。「努めなければならないのは、自分を完成することだ。試みなければならないのは、山野のあいだにぼつりぼつりと光っているあのもしびたちと、心を通じあうことだ」。サビーノもやはり同じ視点から人間を温かく見つめている。彼のクロニカに触発され、読者は改めて自分の周りに目を向ける。そして普段見落としている大切なものに気づかされるのだ。ここに文学本来の役割というものがある。

さいごに

「人間、このいとおかしき生き物」—これがサビーノのクロニカの真髄であると思われる。人は誰しも正解な言葉では表現し得ない思いを常に抱えているものであるが、形のないもやもやに悩まされるとき、ふと共感できる「何か」に出逢うと、救われるのだ。声無き叫びや不公平な世の中に対する押しとどめられた不満—これらを代弁してくれる作品に共感するのだ。実際にそのような体験をすると、その作品はいつまでも心に残る。クロニカの薄命たることはすでに述べたが、普遍的で強烈なインパクトをもって読者を魅了し、癒してくれる身近なものとしての、クロニカの存在意義がこうした点から見出される。(14)

サビーノは人間の様々な思いを丁寧に掬い上げてくれる、壊さぬようにそっと。読者はその感情の渦に飲み込まれ、共感し、そして最後に浄化されていく。

インタビューでサビーノがなぜ物書きになったかについて述べているが、その答えの中に彼のスタンスをうかがい知ることができる。子供のころに読んだ話は、時折結末が気に入らなかったのもので、自分だけの展開と結末を想像していた。そして実際自分の好きなように展開するストーリーを

書くようになったことが出発点だったと言う。またテーマは、実生活の中で自分や知り合いの身の上にかかる出来事なのだが、それは創造で作り返えられる。つまり実際に起こった出来事ではなく、こうあってほしいという希望の上に成り立つものへと変わるのだ。

サビーノは2004年に死去しているが、その墓碑にはこう刻まれている。「男と生まれ、子供として逝く。」これは、1982年に出版された小説『鏡の中の少年』(*O menino no espelho*)に書かれた一節から来ている。

子供の頃は、大人たちによく聞かれたものだ。大きくなったら何になるのと。今はもう聞かれない。もし聞かれたら、こう答えるよー子供になりたいとね。

彼の生涯の夢は、子供だけがもっている曇りのない視点だったとあるが、どの作品も温かいシンプルさに満ちている。それはやはり穢れのない子供の眼でこの世界のすべてを写し取ろうとする、人間サビーノの計り知れない才能と姿勢の結果なのである。それらを通して読者は教えられるのだ、他愛のない日常の生活にこそ、大切にすべきことが存在するということを。そしてこの瞬間、私たちはクロニカが、マイナーなジャンルでありながらも文学本来の役割を果たしていることを実感するのである。

※ ポルトガル語文献および引用したクロニカは、本稿のために筆者が独自に翻訳したものである。

注

- (1) トイダ、エレナ「クロニカ(1)-ブラジル文学における独自のジャンル」、『上智大学外国語学部紀要』第36号、2001年、pp.133-147
- ― 「クロニカ(2) - 20世紀初頭のクロニスタ、ジョアン・ド・リオ」、『上智大学外国語学部紀要』第38号、2003年、pp.131-149
- ― 「クロニカ(3) - 叙情のクロニスタ、ルーベン・ブラガ」、『上智大学外国語学部紀要』第42号、2007年、pp.121-134
- (2) Afrânio Coutinho 現代の批評家たちに多大な影響を与えた20世紀

初頭の文芸評論家

- (3) Antonio Candido 20世紀におけるブラジル文壇評論家の最高峰
- (4) cronista クロニカを書く人のことを指す。
- (5) Henri Cartier-Bresson 『こころの眼』、堀内花子・訳、岩波書店、2007年、26ページ。
- (6) 「読書を好きになるために」 (Para gostar de ler-vol.4, São Paulo, Ática, 1986)、8ページ
- (7) Mário de Andrade 1922年サンパウロで開催された近代芸術週間でモダニズム運動を提唱したリーダーの一人
- (8) Paulo Mendes Campos ミナス・ジェライス出身の詩人、クロニスタ
- (9) Moisés, Massaud, 500ページ、文献参照。
- (10) Manuel Bandeira 1922年の近代芸術週間におけるモダニズム運動の先駆者
- (11) bar ブラジルでは市街地でよく見かける軽飲食店。カウンター式になっていることもあり、主にコーヒーを飲むために人々が立ち寄る店というのが一般的な定義である。「バー」と訳すには誤解を招くので、あえて「バル」とする。
- (12) Davi Arrigucci Jr. 現代を代表する文芸評論家。ブラガのクロニカ集の編集者で、クロニカについて明確に考察している。
- (13) サン・テグジュペリ、アントワヌ、『人間の土地』、訳・堀口大学、新潮文庫、1990年、5～6ページ
- (14) 講義で学生たちにクロニカの分析をさせると、大半がサビーノのファンになる。特に子供をテーマにした作品は、実に楽しそうに発表するのである。言葉や文化的な差異を超越して、自分たちと共有できる人間臭さを発見するからであろう。

参考文献

Bosi, Alfredo (org.), *A história concisa da literatura brasileira*, São Paulo, Cultrix, 1977.

Braga, Rubem, *Os melhores contos de Rubem Braga*, São Paulo, Global, 1999.

- Coutinho, Afrânio, *Notas de teoria literária*, Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1976.
- Crônica na sala de aula*, 2.ed., São Paulo, Itáu Cultural, 2004.
- Moisés, Massaud, *História da literatura brasileira*, vol.V, São Paulo, Cultrix, 1983-1989.
- Moisés, Massaud, *Pequeno dicionário da literatura brasileira*, 6.ed., São Paulo, Cultrix, 2001.
- Sabino, Fernando, *O homen nu*, 36^a.ed., Rio de Janeiro, Record, 1997.
- Sabino, Fernando, *A mulher do vizinho*, Rio de Janeiro, Record, 1997.
- Sabino, Fernando, *A companheira de viagem*, 12^a. ed., Rio de Janeiro, Record, 1998.
- Sabino, Fernando, *A inglesa deslumbrada*, Rio de Janeiro, Record, 1992.
- Sabino, Fernando, *Gente*, 4^a.ed., Rio de Janeiro, Record, 1996.
- Sabino, Fernando, *Deixa o Alfredo falar!*, 13^a.ed., Rio de Janeiro, Record, 1992.
- Sabino, Fernando, *A falta que ela me faz*, 16^a.ed., Rio de Janeiro, Record, 1995.
- Sabino, Fernando, *O gato sou eu*, 17^a. ed., Rio de Janeiro, Record, 1992.
- Sabino, Fernando, *O tabuleiro de damas*, 5^a.ed., Rio de Janeiro, Record, 1999.
- Santos, Joaquim Ferreira dos (org.), *As cem melhores crônicas brasileiras*, Rio de Janeiro, Ed.Objetiva, 2007.
- Sá, Jorge de, *A crônica*, São Paulo, Ática, 2001.
- Setor de Filologia da FCRB, *A crônica*, Campinas:Ed.Unicamp, Rio de Janeiro: Fundação Casa de Rui Barbosa, 1992.
- Stegagno-Picchio, Luciana, *História da literatura brasileira*, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 2004.
- Stern, Irwin, *Dictionary of Brazilian literature*, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1988.

